九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 大潮元皓の生涯

若木, 太一
長崎大学

https://doi.org/10.15017/4742091

出版情報：雅俗. 19, pp.48-72, 2020-07-15. 雅俗の会
バージョン：
権利関係：

◉論考

# 大潮元皓の生涯

若木　太一

大潮が初学した唐話の師は國思靖で、同門の俊秀に岡嶋冠山・雨森芳洲・慧通あるいは天産霊苗らの僧侶がいた。冠山は唐通事として通訳の経験があり、同じく二人は荻生徂徠の「訳社」の講師をつとめた。これを〈崎陽の学〉とさげすむ者もいたが、いずれも〈唐話〉をとおして古文辞という時代の学問・文芸思潮にかかわった。大潮は「崎人華を学びて而して日に日に華に遠ざかる」（「贈大生維篤序」『西溟余稿』文部一）と「今之華（清朝）」ではなく「古之華（唐）」を学べとうながしている。

大潮の行跡は、売茶翁こと法兄月海元昭との関係をふくめて、肥前・京洛・江戸をはじめ中国・朝鮮との交流空間を繋ぐ人々とも交錯している。かれの生涯をたどることで多様な文苑の関係性が見えてくるであろう。

大潮については、これまで石崎又造『近世日本に於ける支那俗語文学史』をはじめ、川頭芳雄氏、高橋博巳氏その他の調査・論考がある。それらは『松浦詩集』三巻、『魯寮詩偈』一巻、『魯寮文集』二巻、『西溟余稿』五巻、『魯寮尺牘集』二巻など刊行されたものを主とし、売茶翁とのかかわりにも及ぶ。しかしこの他、写本で遺されている『瓊浦游艸』一巻、『魯寮稿』十七巻や埋もれている未知の書簡（数紙の紹介はあるが）など考慮される必要があろう。

とりわけ黄檗僧としての活動についての論究は少ない。隠元渡来からおよそ八十年が経過した宇治の黄檗山で、第十三代竺庵浄印のもとで五八歳の大潮は享保二十年に監寺や通訳をつとめており、その間に竺庵下での内紛にかかわり、町奉行の裁定を仰ぐ事態にも遭遇した。その僧籍にあっての行跡についてはいうまでもなく、大潮にかんしてはこれまで基本的なその出自さえ明瞭にされていない。

時代思潮にかかわる多くの課題があるが、本稿ではまず等閑にされている大潮元皓の出自を明らかにし、生涯の大略を追跡する。

使用した資料は次の通り。書名の次に刊年と刊行時の年齢を記す。

1，『松浦詩集』大・三巻三冊　元文五年（一七四〇）　六三歳。
2，『魯寮詩偈』大・一冊　延享元年（一七四四）　六七歳。
3，『魯寮文集』大・二巻二冊　延享二年（一七四五）　六八歳。
4，『西溟余稿』大・文部三冊　延享五年（一七四八）　七一歳。
5，『〃　〃』大・詩部二冊　宝暦八年（一七五八）　八一歳。
6，『魯寮尺牘集』大・二巻二冊　宝暦一一年（一七六一）　八四歳。
7，『瓊浦游艸』写・大・一冊　宝暦四年（一七五四）　三月以降成立。

8，『魯寮稿』写・大・一七巻一七冊

明和三年（一七六六）　四月以降成立。

右のうち『瓊浦游艸』は、宝暦三年から同四年（一七五三～五四）の大潮七六歳～七七歳の長崎廻遊を記す。『魯寮稿』は、寛保三年から明和三年（一七四三～六六）までの六六歳～八九歳の詩文や記事を記す。大潮は年月日、干支などを記しており、あたかも日記のように生涯にわたって記録している。しかも記憶も確かで、その明晰さは晩年にいたるまで衰えていない。

以下、他者の証言と照合し、その真正性を測りながら生涯のあらましを記しておきたい。

## 一　大潮の出自――父と母

大潮元皓は本姓は浦郷（うらごう）氏、名は元皓、字は月枝、別号は魯寮・西溟・泉石陳人などと記す。

延宝六年戊午（一六七八）正月六日、肥前国松浦郷伊万里（佐賀県伊万里市伊万里町）で出生（『魯寮稿』五その他）。これを明らかにするのは、寛延元年（一七四八）、大潮七一歳の誕生日に詠んだ詩である。

新正六日、余が生辰也。余今春七十一、聊（いささか）一律を裁し、用（もつ）て所思を述ぶ。

海国春風吹故関　　海国の春風故関を吹く
上方棲鳥暮飛還　　上方の棲鳥暮れに飛還す
自憐華髪臨臺白　　自から華髪を憐れみ臺の白きに臨む
那得雲衣映席班　　那（いか）んぞ雲衣を得て席班に映ぜしや
清世頻逢初度日　　清世頻（たび）たび逢ふ初度の日
幽人偏愛萬重山　　幽人偏へに愛す萬重の山
蓼莪称罷遙回首　　蓼莪（りくが）を称するは罷めて遙かに首を回らす
先墓超々何処攀　　先墓は超々たり何処にか攀（のぼ）らん

去歳新正、先茲見背、是月十日、乃小祥之諱辰、予以将有公事故、不能即往、而晨暮、故有結句。

（『魯寮稿』五）＊原漢文、訓読は筆者。以下同）

**＊故関**――郷里松浦。　**＊上方**――寺。
**＊華髪**――白髪。　**＊臨臺**――墓の前。
**＊雲衣**――雲の衣。　**＊席班**――冥界の席次。
**＊清世**――太平の世。
**＊蓼莪**――『詩経』小雅、蓼莪。親の没後に孝養を尽くせなかったことを悲しむ詩。
**＊幽人**――一般に隠君子をいうが、ここは亡父母のこと。考父慈恭の失を悔やむ意がある。

大潮はこの前年七〇歳の延享四年（一七四七）一月十日、母（鏡月元照禅尼、八八歳）を亡くした。生前、母への孝養ができなかったことを深く悔やんでいる。父は、大潮が泉南に滞在していた五二、三歳のころに歿したらしく、父の死については語るところがない。理由は未詳。年月日などをまめに記す大潮の性格にしてはやや不審であり、何らかの事情があったか。それゆえか母への慕懐は極めて深い。

鏡月元照禅尼、延享四年丁卯正月十日を以て、（伊）萬里郷に死す。年八十有八矣。越て十二日、訃蓮池に至る。不肖僧男元皓、西を向き大いに哭き、位を為り以て祭る。其の詞に曰ふ、

一夜東風吹愛河　一夜東風愛河に吹き
春流千尺忽揚波　春流千尺忽ち波揚がる
太虚寥廓清如鏡　太虚は寥廓清きこと鏡の如し
明月団欒気色多　明月は団欒にして気色多し

（『魯寮稿』四（二二ウ）

＊**愛河**――仏語で愛欲。河は人を溺れさせることからの比喩で母子の煩悩をいう。

＊**太虚**――天空。　＊**寥廓**――からりとして広い。

＊**団欒**――まん丸。

さらに次の詩がある。

悼母氏并序

皓十六年前、泉南に在りし時、家君郷に卒す。而して舁棺に繇る無し。今年丁卯（延享四年）正月十日、母氏に背かる。而して事に因り地を避れ、又舁棺に繇ること無し。然るに皓客歳至日を以て、堂下に拝別す。則ち死生永訣を知るは今日より始まる。以て今之を観るに則ち果して爾り、旦なり。母氏恒に言へり、吾が児辞するの日は即ち我が死日のみ、豈に必ず梓里に奔喪せん哉。最後に皓政府に告げて郷に還る。乃ち母氏初めての忌の辰を顛る也。母氏今年八十有八、嗚呼哀しき哉。皓時に七十、此に作る詩寓感なり。其の詩に曰く、

青春何鬱々　青春何ぞ鬱々
白日転遅々　白日転た遅々たり
寧識趨庭處　寧ち趨庭の處を識り
重称陟岵辞　重ねて陟岵の辞を称す
幽芳寒綵服　幽芳は綵服を寒し
逝水恋瑤池　逝く水は瑤池を恋ふ
既奉金仙道　既に金仙道に奉じ
超昇仰淑儀　超昇して淑儀を仰がん

（『魯寮稿』四（二六ウ）

＊**舁棺**――棺を担ぐこと。

＊**梓里奔喪**――異郷で親の死を聞き、故郷に奔り帰って喪に服すること。

＊**綵服**――子供のような五色の衣服を着て親を喜ばせた故事。『高士伝』老萊子。

＊**瑤池**――崑崙山にあるという神仙の池。昔穆天子が西王母に逢ったというところ。『列子』周穆子。

＊**趨庭**――家で親の教えを受けたこと。『論語』季氏、第十六「〜鯉趨りて庭を過ぐ。曰く、詩を学びたるかと。〜」。

＊**陟岵辞**――孝子が父を慕うこと。『詩経』魏風、陟岵辞。

＊**淑儀**――九嬪の一で、高位女官の名。

延享四年に松浦の母を亡くした大潮は、折しも蓮池にあり、死に目に会えなかった。十六年前には父の臨終にも会えなかった。併せて親への孝を尽くせなかった不幸を悔いるのである。

## 二　兄弟――一麟浄超居士墓碑銘――

『魯寮稿』九に「一麟浄超居士墓碑銘」が記されている。これは大潮の実弟、浦郷實友の墓碑銘である。大潮一家についても記されている。

長文であり以下途中を省き、要点を述べる。

浦郷實友は、肥松浦郡伊万里の人なり。安右衛門と称す。姓は安部氏、實友はその名。即ち余が家弟にして、余より少きこと七歳、生れは貞享乙丑二年、十一月十六日、宝暦四年七月九日に卒す。年七十歳、本邑萬里明山圓通禅寺に葬る。先慈鏡月禅尼の石塔の後、因って法諱を立て、瑞應軒一麟浄超居士と曰ふ。

嗣子久喜、居士卒するの前一日、書を長淵禅寺に馳せ、父の病革ると告げたり。余乃ち籠に命じて彷徨ひ行く。行きて牛津に至れば日已に夕れたり。遂に輪王に宿し、翼早、辨色せず発ち、晡時に迫び其の居に抵る。則ち居士卒して棺たり。而して薦抜せられよと請ふ。余、香語一篇を説く。蓋し亦傷めり。

夫れ世に嘗て言へり、人兄弟有れば、孰れか天倫の義を推せざらんや。然るに諸れ称して兄弟と為るは、余二人相善きに若かざるは固より論無し。顧みるに余年学に志し、薙髪して道に入る。則ち其の跡迥然として竟に殊なると雖も、而して天地の徳を挙ぐるに、豈に異ならんや。居士は雅しく亦我が仏乗を信じ、其の心未だ嘗て衛護の中に在らざることなし。斯くして余は乃ち永訣の嘆を発し、而して重ねて死生の感を興せり。（中略）

大潮の七歳下の弟は浦郷安右衛門實友という。安倍氏の養子となり安倍家を継いだ。貞享二年（一六八五）十一月十六日生まれ宝暦四年（一七五四）七月九日卒、七〇歳。法名は瑞應軒一麟浄超居士。萬明山圓通禅寺（伊万里市松島町一四八）の先慈鏡月禅尼の石塔の後に葬られた。

夫れ居士は、固より淳行端直の偉人なり。善く人と交り、而して苟くも合はざれば、維だ孝にして、兄弟に友しむ。是れ郷人知る所なり。年甫か十四、家の尊人の命を奉じて摂に出游し、書を学び藝を修め、三年を以て帰る。従伯父瑞雲翁を尋ねて、往きて鹿島老侯に謁す。侯進退を以て称礼す。且つ鼓を善くし、曲故に度り、屡しば恩賜を加ふ。年未だ弱冠、治を務め業を賈す。年三十餘、前田氏を取り四子を生む。伯は乃ち久喜、仲及び叔は皆僧と為る。曰く旭、曰く建なり。旭は即ち余が門人なり。季は正方と曰ふ。巌永氏乞ひて嗣子と為す。故に姓巌永氏を冒す。五女、一は道山氏に適き、一は石丸氏に帰す。一は原田氏に嫁し、餘の二は則ち早凶す。居士の若き者有るは、世に遺憾無き者と謂ふ可し。居士は生平護法を以て己の為に任ず。尤も観世音菩薩に帰敬し、日に普門品若干遍を誦し、以て常課と為す。儻し或ひは出て他方に之けば、則ち中路に之を誦し、未だ嘗て課を闕かさず。（後略）

宝暦甲戌、八月十三日、僧兄元皓大潮撰、撰の日、居士小練忌辰なり。

（『魯寮稿』九）

＊**辨色**――物事を見分ける。　＊**晡時**――申の刻。午後四時前後。

＊**迥然**――遙かなこと。

従伯父「瑞雲翁」とは父の兄弟の三番目の兄谷口氏（享保六年十一月二十三日没。『松浦詩集』巻之中）。實友はそのはからいで鹿島老侯（四代直條カ）に挙用され、鼓を善くし恩寵をたまわったという。妻（前田氏）との間に四子があり、長男は久喜、二男は旭で大潮の弟子、三男は建でこれも僧となる。四男は正方といい巌永氏の養嗣子となる。五女は道山氏に嫁ぎ、六女は石丸氏に、七女は原田氏に嫁いでいる。多産の一家でさらに二人早逝している。

## 三　普門松雲禅師伝

大潮は一五歳の元禄五年（一六九二）に肥前蓮池の法壽山龍津寺（黄檗派）に入り、化霖道龍（一六三四－一七二〇）に師事した。龍津寺は蓮池本名大曲江（佐賀市蓮池町）にあり、大潮にとって初学修業の地である。「南来重ねて我を過ぎ、旧寺曲江の傍、萬里涼飈起き、中秋は霽（はれ）て月光（かがや）く～（後略）」と詠じ、小字で「余が故處」と注をしている（「和玄遂禅衲、遊龍津寺見覩之作」『魯寮稿』十四）。

師化霖は黄檗山で修行すること二年、その後、隠元禅師に随従して渡来した獨湛性瑩が遠江の法林寺いたときに師事した。獨湛が黄檗山第四代住持についた後、帰郷し隠棲した。おりしも蓮池藩主鍋島直之の要請で天和二年（一六八二）法壽山龍津寺を創建し、その開山として招請され住持を勤めていたのである。化霖は元禄十六年、七〇歳を迎えて山内の甘露院に退院し、後を法嗣鏡宗に継がせた。大潮はその後黄檗山萬福寺にあがり、三〇歳のときには華音の通事を勤め、その後は江戸へ出て徂徠とその門に集うことになる。

享保十年（一七二五）、大潮は四八歳の春、京都へ遊んだ。侍者がもたらした『月坡全録』五の「松雲禅師伝」を読み、師の事蹟を記すに文辞錯出し、その西東野語にいたたまれず、大潮は新たに松雲伝を書くにいたった。身内の先祖の一人であり、伝えておくべき事ありと夙志を記す。

大潮が記した「普門松雲禅師伝」（『西溟余稿』文部二）はつぎのような内容である。

（前略）禅師は吾が祖母の叔父にして、亦肥の産なりと云ふ。始め禅師生まれて奇徴有り。其の父田氏、之れを器なりとす。師年六歳、稍や国字を識る。而して其の里中の故旧自リ、居恒相称すらく「田氏子有り」と。年甫めて十歳、父挾んで普門に至り華嶽公を礼す。一夕公夢むらく、童子有りて殿中普陀大士の肩に跨がると。覚めて師至る。遂に前夢と協ふ。公之れを奇とす。乃ち法器なることを知りて乞ひて弟子と為す。之れに名づけて宗融と曰ふ。松雲は其の字なり。（中略）

松雲宗融禅師は慶長十四年（一六〇九）の生まれで、大潮の祖母（浄看妙厳禅尼）の叔父にあたる人である。田氏に三人の息子があり、その仲男が祖母の父で、その末弟が叔父すなわち松雲宗融禅師である。華嶽公の弟子となった松雲は学問を好んだが、使役には役に立たずだった。華嶽公は「宗融は痴なり」といって庇った。松雲一九歳の時、侍司、ついで記室を勤めた。その草隷の書は評判でまた国風、国字にも精通していた。二一歳のとき長崎に至り、その後、京の建仁寺に遊学した。また東関をめぐり曹洞・臨済の諸僧に謁した。大潮はこの遙か昔の松雲宗融を信じ慕っていた。

（中略）吾が父生まれて三歳、吾が大父を喪せり。而して吾が祖母、諸を師（松雲）に託して灑掃の役に給せしむ。譜に曰く、田氏三子を生み、伯先だちて卒す。仲二男一女を生む、と。女は吾が祖母にして、而して叔は師と為る。祖母、四子有り。吾が父は其の季なり。次子は僧と為る。其の名を重山と曰ふ。師の法嗣を以て肥の瑞應に住す。余元皓、三歳なるとき山其の寺に化す。時に山、年三十有六。師游方十年、田氏郷に卒して、師乃ち潸然（さんぜん）として帰りて其の母を省す。母は慧女なり。始め所天を失して依倚（たよ）

る所無し。師の帰りて﨑の皓臺に適くに値ふに会ひて、母之れを喜ぶ。師、遂に母と偕に往く。一禎和尚、擢んでゝ首座に充つ。且つ光雲を与えて命じて居らしむ。因りて小堂を寺の北街に築いて、以て母を養ふ。

「譜に曰く〜」とあり、大潮は家譜を参観してこの文章を綴っているようである。すなわち大潮の父は三歳の時、「吾が大父」（大潮の祖父）を喪った。「吾が祖母」（大潮の祖母）は息子（大潮の父）を師（松雲）に託して「灑掃の役」（掃除などの下働き）にあたらせた。家譜によれば、「田氏は三人の子を生み、長男は早逝、次男は二男一女を生んだ。その一女が私（大潮）の祖母であり、叔は師（松雲）となった」という。そして祖母には四人の子が有り、大潮の父は季子であった。長男は早逝であろうか、次男は僧となり重山といい、肥前の瑞應寺（佐賀県武雄大野村。龍造寺氏が開基）に住んでいる。大潮が三歳の時、重山はその寺で寂した。歳は三六。

師（松雲宗融）は一〇年ほど諸国を游方していたが、田氏が歿したと知り帰郷した。頼れる人を喪った母を連れて松雲は長崎の皓臺寺に行った。

海雲山皓臺寺（現、長崎市寺町一丁目）は、慶長十三年（一六〇八）年、亀翁良鶴（肥前松浦郡山口村の飯盛山洪徳寺第七代）の開創で、重興開山が一庭融頓である。一庭はもと肥前佐賀の玉林寺（現、佐賀市大和町久池井三二五七）の住持であった。皓臺寺は切支丹排斥のため第三代長崎奉行長谷川左兵衛が風頭山麓に建立、笠頭山洪泰寺と号した。長崎市中では曹洞宗の本山格の寺である。「光雲を与えて命じて居らしむ。」とは、その末寺の月桂山光雲寺（現、長崎市出来大工町四番地）の住持にしたことをいう。松雲宗融は正保四年（一六四七）から承応三年（一六五四）まで八年間在職した。寛文四年（一六六四）一月四日示寂した（『長崎市史』地誌編仏寺部では寛文五年示寂とする）。

松雲とその母についての逸話を伝える。松雲は光雲寺の北街に小堂を築いて母を住まわせた。ある日、母が寺参り中に急な雨が降り出し、母の傘と華履（女物の履き物）をもって迎えに行った。しかし途中でこれを見た人々は怪しんだが、母はこれを喜んだ。また別の日、母の好きな魚を買い串に刺して帰ると「釈氏の宜しき所に非ず」と誡められた。それをくりかえしたある日、母は髪を切り出家し妙善と称した、という。この逸話について大潮は、「松雲の母は〈慧女〉であった」と記す。月坡禅師が伝える「松雲禅師伝」（『月坡全録』）については「母の性卒急、好んで魚を食ふの数語、未だ嘗て巻を廃して嘆ぜずんばあらず」と。さらに「甚だしき哉、坡公の誣に近きことなり」と激しく非難している。「月坡公は苟且（なおざり）に失して、其の尼為るの由を悉にせず」と、「孝」についての深慮がかけているともいう。

さらに松雲翁が好んで箏を鼓した逸話がある。長崎丸山に梅という若く美しい妓女がいた。善く歌い箏に長じていた。仏乗を信じて松雲師に一度お目にかかりたいと頼んだ。松雲翁が出かけると普門品を説いて下さいと請う。他の衆妓も教えを受けた。翁は梅と箏を鼓すこと再三におよんだ。次の日、翁が市中に行くと梅は衆妓とともに行き過ぎ、身を隠した。嫌疑を避けたのであった。月坡公は箏を琴と誤解し、俗化しているという。

承応三年（一六五四）秋、普照国師隠元禅師が聘に応じて渡来された。東明山興福寺において謁し、偈を造り隠元禅師に呈し、光雲寺に

戻った。松雲翁は明暦三年（一六五七）四九歳の時請を受け、母とともに普門山圓應寺（現、武雄市武雄町）に行き、山中の一室に住み、雨にも月にも箏を鼓し母に孝したという。これは大潮が祖母（浄看明厳）から直接聞いた話だという。寛文元年（一六六一）春、松雲翁は諫早に行くが、この年五月その母（寿柏元剛禅尼）が郷里で卒し普門山中に埋葬した。その三年後の寛文四年（一六六四）一月四日、松雲宗融翁は示寂。慶長十四年己酉（一六〇九）生まれで五六年の生涯であった。

## 四　大潮の家系図と大潮年譜稿

右に掲げた大潮の記すところを系図のカタチ（推定）として図示すれば、およそ次のようになるであろう（図）。

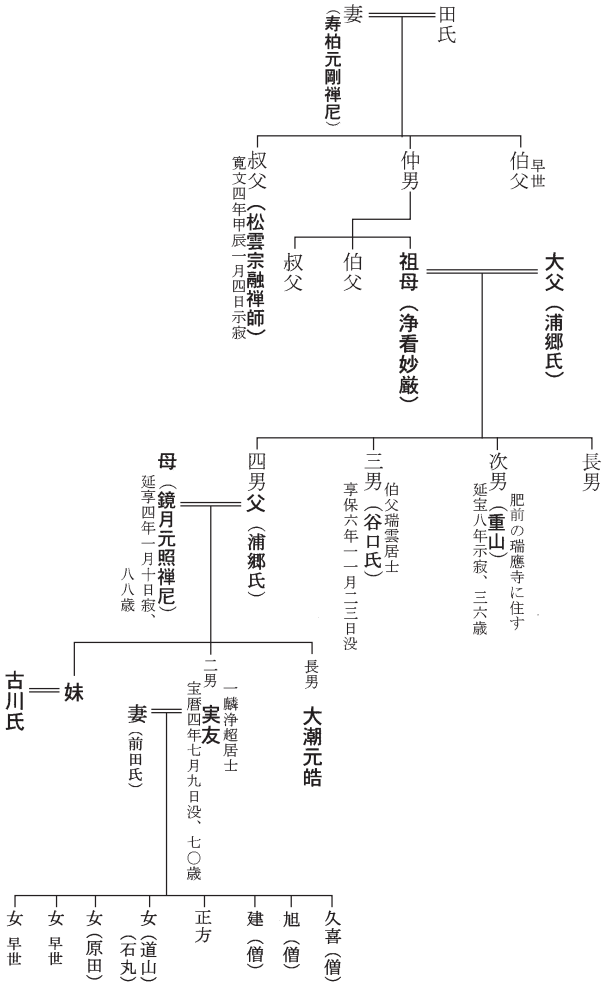
この田氏の孫にあたる大潮の祖母（浄看妙厳禅尼）が大父浦郷氏に嫁ぎ、その四男として父が生まれた。前述したように大潮は父親についてはその名すら記していない。なんらかの事情があったのではなかろうか。父の大叔父にあたる松雲宗融については、月坡禅師の誤解にもとづく評伝を強く否定し、自身の先祖を擁護している。

大潮は正徳二年（一七一二）再度江戸に出て、三五歳の二月十六日、初めて荻生徂徠と出会ったようだ。そこに集う牛門の俊秀らと交友を重ねながら深川、麻布など各地を転々とした。その居留の室を魯寮と称した（「卜居深川仍扁曰魯寮」『西溟余稿』巻之上）。それはかつて師化霖道龍から「魯（鈍い）」と言われたことによる。

魯寮

我師称我魯　我が師我を魯と称す
我魯信依然　我が魯信に依然
以此行天下　此を以て天下に行き
得寮到處扁　寮を得て到る處に扁す

（『松浦詩集』巻之中）



（図）大潮元皓の家系図（筆者作成）

大潮は、師の言う「魯」はともあれ、孔子の弟子評（『論語』先進第十一「柴や愚、参や魯、師や辟、由や喭」）によるかのごとくに受け容れたかと思われる。同遊諸友らとの文事にかかわり、詩人かつ論者として自信をえての発言である。

そして五〇歳の享保十二年（一七二七）、自らの人生をあらためて懐旧し詠嘆する。

有感

憶年十五乍入道　懐ふ年シ十五乍ち道に入る
我師目我為種草　我が師我を目て種草と為す
読書日記数千言　書を読みて日々に記す数千言
古仏遺訓奉善巧　古仏の遺訓善巧に奉ず
已矣即今倏五十　已ぬ即今倏ち五十
功労尺寸無所立　功労尺寸立つ所無し
但将慚愧訴何人　但たゞ慚愧を将て何人にか訴へん
燈前自語百感集　燈前自語して百感集まる
辞郷依旧道路艱　郷を辞し旧に依りて道路艱む
道路春光照客顔　道路の春光客顔を照す
縦有黄金能交際　縦ひ黄金の交際を能くする有るも
吾道千秋誰与還　吾が道千秋誰と与にか還らん

（『西溟余稿』詩部上）

ふりかえれば一五歳で仏の道に入り、師化霖から「魯」と称され「種草」と見なされた。書を読み古仏の教えに遵い、仏道に励んで善巧（人を導く方便）を積んだ。たちまち五十年が経って、功労もなく今や拠って立つ所はない。いちどは故郷を離れ、また旧盧に還るも艱難に苦しむことは尽きない。多くの人々と出会い、かりに「黄金の交際」（金による友）――あるいは売茶翁のような理想の友――がいたとしても、生涯をともに何時、誰とともに還る道があるだろうか、と。

師は「汝、務めて遠き者大ひなる者を為よ。務めて近き者小なる者を為ること莫れ」とも言った（『西溟余稿』文部二）。

大潮は肥前・肥後の九州はもちろん、京・阪、江戸へと往還の旅に明け暮れた。行く先々で友をえて詩文を論じ、黄檗山での勤めを経て、この後龍津寺の住寺を継承するなど、さらに三十九年の後半生がある。その往生に到るまでの生涯は、時に療養することもあったが、基本的には強靱な身体と信仰、真面目で勤勉な性格によって養生され長寿をえたと思われる。

次に大潮の記した詩文・著述から、年月、干支などを記した明らかな事項を立てて、基本的な略年譜を掲げ、その生涯のあらましを記しておく。本年譜はもとより基礎稿であり、生涯の広範にわたる活動の探索は今後に期待される。

大潮の詩文はおおむね平明・清澄である。黄檗の僧籍にあり、龍津寺にもどってからは年忌・葬祭など仏事の記事が大半を占めているが多くは省略した。冒頭に記したように大潮が交流した周辺の人物たちは、時代の文学思潮を牽引した主要メンバーである。崎陽の学を有効とみて唐話を学び、言語と詩文、理想と思索を込めた著述をそれぞれ遺し、一家言をもつ興味惹かれる人物たちである。大潮の暦年にそって、その言語生活にかかわる人物と事象を中心に記す。

## 大潮年譜稿（＊印は関連事項）

本姓は浦郷氏、名は元皓、字は月枝、別号は魯寮・西溟・泉石陳人。

延宝六年戊午（一六七八）一月六日、肥前国松浦郷伊万里（現、佐賀県伊万里市伊万里町）で出生（『魯寮稿』五）。

延宝八年庚申（一六八〇）三歳。

この年、大潮の伯父（父の兄）重山が肥前の瑞應寺にて示寂。三六歳。

天和二年壬戌（一六八二）五歳。

＊蓮池藩主鍋島直之が寶壽山龍津寺をこの年建立、化霖道龍（一六三四－一七二〇）を開山に迎える（福山朝丸「売茶翁年譜」『賣茶翁集成』以下同）。化霖は隠元、木庵に参禅し獨湛性瑩の法を継いだ（『西溟余稿』文部二）。

天和三年癸亥（一六八三）六歳。

＊一月一二日、賣茶翁の父芝山杢之進没、五三歳。龍津寺に葬る。法名、無隠軒芝山常名居士（「売茶翁年譜」）。

貞享元年甲子（一六八四）七歳。

＊一月二〇日、黄檗第二代、木庵性瑫示寂。七四歳。

貞享二年乙丑（一六八五）八歳。

一一月一六日、実弟浦郷實友、伊万里で誕生（『魯寮稿』九）。

＊この年、月海元昭（賣茶翁・一六七五－一七六三）化霖の弟子となる。

貞享四年丁卯（一六八七）一〇歳。

九月二七日、師に伴われて黄檗山に到り、獨湛に会い六〇歳の賀に臨む（「化霖和尚行業記」『西溟余稿』文部二）。

元禄元年戊辰（一六八八）一一歳。

＊化霖黄檗山より龍津寺へ帰る（『西溟余稿』文部二）。

元禄二年己巳（一六八九）一二歳。

このころ長崎に行き、国思靖につき華音を学ぶ。

元禄五年壬辰（一六九二）一五歳。

蓮池の黄檗宗龍津寺に入り祝髪、化霖に師事（「有感」『西溟余稿』）詩部上）。師に従い英彦嶽に登る（『魯寮稿』五）。

元禄九年丙子（一六九六）一九歳。

四月八日、大潮は化霖の法跡を継ぎ、黄檗山に上がり獨湛に謁した。以後京畿の間を歴遊する事四年に及ぶ（「売茶翁年譜」）。

元禄一一年戊寅（一六九八）二一歳。

宇治の万福寺に上がり、獨湛に謁した。この頃、京に滞在し「煌煌京洛行」を詠み、近江、伊勢を遊歴する（『松浦詩集』上）。

元禄一四年辛巳（一七〇一）二四歳。

京畿より肥前に帰り、以後三年間師に侍する（「祭本師和尚文」『西溟余稿』文部三）。

元禄一五年壬午（一七〇二）二五歳。

二月、寿恩院主法英尼（鍋島市正の女）寂。（「寿恩院主法英尼墓碑銘」『西溟余稿』文部三）。

元禄一六年己未（一七〇三）二六歳。

＊五月二八日、月海元昭の俗兄芝山杢之進常景没し、龍津寺に葬る。法名、大玄軒覚庵浄通居士（売茶翁年譜）。

＊七月、化霖は龍津寺を弟子鏡宗に譲り、甘露院（貞享三年、寺の双竜松の下に建てた庵）に隠棲した（売茶翁年譜）。

宝永元年甲申（一七〇四）二七歳。

宝永四年丁亥（一七〇七）三〇歳。

黄檗山にあがり華音の通事を務める（「祭本師和尚文」『西溟余稿』文部三）。

孟冬、京師より帰る途中、向陵、厳島に遊ぶ（「遊厳島記」『西溟余稿』文部二）。

宝永五年戊子（一七〇八）三一歳。

肥前松浦伊万里の厳栗神社の華表に銘を記す。「此我邑尊祠之最者」「龍津釈元皓大潮敬撰／宝永五歳次戊子春閏正月穀旦」（「厳栗社石華表銘并序」『西溟余稿』文部二）。

宝永七年庚寅（一七一〇）三三歳。

＊夏、化霖が平戸の瑞石寺へ招請され、大潮従って行く。平戸から帰り江戸へ赴く（「売茶翁年譜」）。

この年、江戸に行き、岡白玉（木下順庵門）と知り合い、華音の教授（「贈岡白玉出仕序」『西溟余稿』文部一）。

一〇月八日、江戸へ向かう途中、東海道藤河の西の茶亭での「紀巖淵事」を三島宿で書く（『魯寮稿』三）。

正徳元年辛卯（一七一一）三四歳。

二月、大潮江戸にあり、石叔湛（石川大凡）と梅花を詠む（『松浦詩集』上）。

＊一〇月五日、岡嶋冠山を迎え徂徠「訳社約」を作る。

＊一〇月一一日、朝鮮通信使一行が江戸入りする。雨森芳洲真文役として随行。一一月一日、将軍に謁見し、同月一九日江戸を発った（『韓客唱和集』）。

正徳二年壬辰（一七一二）三五歳。

二月一六日、この年に初めて荻生徂徠と会い、韻をうけて桜花の盛りを詠む（『松浦詩集』中）。江戸では、猗蘭臺（本多忠統）のほか石叔潭・岡白玉・僧覚印・服部南郭・雨森芳洲・越智雲夢（曲直瀬正珪）らと交友。とりわけ雲夢の書斎秋桂山房（小石川の白山書院）には石叔湛とともに往き来があった。また猗蘭侯邸にしばしば招かれ詩酒を楽しみ、大潮の室へも往来があった（『松浦詩集』上・中）。この間、江戸深川に住み、荻生徂徠ら蘐園の人々と交流、中国語を指導する。八月から九月の間、江戸滞在中の雨森芳洲が大潮のもとを訪れ、大潮の詩稿への序文を届ける（『松浦詩集』中）。

正徳四年甲午（一七一四）三七歳。

＊一〇月、釈慧通が國思靖の遺稿を徂徠にもたらし、徂徠「國思靖遺稿序」を書く（『徂徠集』巻之八）。

正徳五年乙未（一七一五）三八歳。

四月二二日、深川から転居先を探し、牛込に滞在中に竹田春庵宛に書簡あり（『福岡藩儒竹田春庵宛書簡集』、以下略称）。

＊一〇月、瑞雲山大龍寺（南品川）の香國道蓮禅師が奥州仙台の伊達吉村に請われ両足山大年寺の六代住職となる（「賀大龍香國和尚住大年」『西溟余稿』文部一、『徂徠集』二九）。

一一月一日、深川から麻布へ移り、草廬を魯寮と称す（「魯寮記」『西溟余稿』文部二・『竹田春庵宛書簡集』）。

一一月一四日、同月二〇日過ぎに草廬魯寮の畳替えの予定、及び漂着唐船の俗語の意味を伝える書簡（『竹田春庵宛書簡集』）。
一二月二九日、竹田春庵邸へ罷り、馳走になり金子一片を贈られた礼状を書く（『竹田春庵宛書簡集』）。
一二月晦日、竹田春庵が東都寓舎魯寮を訪れ、神毅斎（神屋立軒）著『帰鞍吟草』を持参、大潮はその「記誦」広く「該博」なる学を「久遠」と評価する（「神毅斎帰鞍吟艸序」『西溟余稿』文部一）。

享保元年丙辰（一七一六）三九歳。
一月二七日、他出中に竹田春庵が「御年玉」など贈物を届けてくれた礼状を出す（『竹田春庵宛書簡集』）。
春、東都の諸友と「尚書會業」（読書会）を開く（『西溟余稿』文部三）。
＊六月、吉宗将軍職第八代を継ぐ。
九月一三日、諸友とともに幕府儒官三宅観瀾邸にて残菊を詠み呈す。また石川淑潭（之清）邸に寓し往来する（『松浦詩集』中・下）。

享保二年丁酉（一七一七）四〇歳。
三月、安藤東野の廬屋に猗蘭侯を迎える中、大潮も徂徠とともに招かれ詩作（『松浦詩集』中、『東野遺稿』巻上）。
五月二二日、猗蘭侯及び諸氏との送別会に詩を復す（『松浦詩集』中）。
六月、大潮が西帰するにさいし送別詩を徂徠（「送魯子帰海西序」『徂徠集』十）、安藤東野（「送大潮上人序」『東野遺稿』中）、金華（「送大潮上人序」・『金華稿刪』四）、猗蘭侯（「送大潮禅師帰西序」『猗蘭臺集』初・四）、南郭（送大潮師序」『南郭先生文集』初六）が寄せた。また三宅観瀾「送浮屠大潮師序」（『観瀾集』）。
夏、八年間の滞在を経て江戸から肥前龍津寺へ帰る（『松浦詩集』上）。

享保三年戊戌（一七一八）四一歳。
元旦、江戸で新年を迎え、夏まで交遊（『松浦詩集』下）。
五月、京都へ出て、秋に摂津・泉州などを転住、逆旅一〇年に及ぶ（『松浦詩集』上・中）。

享保四年己亥（一七一九）四二歳。
＊四月一三日、安藤東野没、三七歳（『猗蘭臺集』初・四）。
大坂を経て夏六月、泉州へ赴き、唐金氏の垂裕堂に滞在、仲秋には、京都へ還り月を賞す（『松浦詩集』中、「垂裕堂記」『西溟余稿』文部二、『松浦詩集』中）。

享保五年庚子（一七二〇）四三歳。
元旦、泉南佐野の唐金梅所邸で新年を迎える（『松浦詩集』下）。『梅所詩稿』に序文を寄せる。『梅所詩稿』二巻刊（豫章堂／日進堂仝梓）。「梅所詩稿序」（『西溟余稿』文部一）。
二月一日、淀川を船で京都へ赴く（『松浦詩集』下）。
六月、天産霊苗『聲音對』一冊刊。大潮閲、慧通校（『聲音對』）。
一一月九日、寶壽開山化霖和尚、甘露院にて示寂。八七歳。
大潮は泉南にいて一二月九日に訃報を知り、直ちに帰り追慕する（『松浦詩集』中、「寶壽開山化霖和尚行業記」『西溟余

稿』文部二、「祭本師和尚文」『西溟余稿』文部三）。

享保六年辛丑（一七二一）四四歳。

＊一一月二三日、伯父瑞雲居士没（『松浦詩集』中）。

享保七年壬寅（一七二二）四五歳。

三月二四日、伯父瑞雲居士の訃報を受け偈を作って追悼した（『松浦詩集』中）。

六月二三日、「恭光明圓通和尚八十序」を書く（『西溟余稿』文部一）。

享保八年癸卯（一七二三）四六歳。

蓮池へ戻り、龍津寺に住す。夏、藤侯之基・之淳とが来訪、請われて「獨楽岡記」を書く（『西溟余稿』文部二）。

四月六日、舅元翠居士卒す、同月中旬「哀詞一章」を献ずる（『魯寮詩偈』）。

享保九年甲辰（一七二四）四七歳。

元旦、龍津寺の旧廬に帰り春柳を見る（『松浦詩集』中）。

春、京都への旅を予定し、法兄鏡宗、知友に別れを告げる（『松浦詩集』上）。同春、黄檗東堂悦峰道章の七〇歳に賀詩を詠む（『松浦詩集』中）。

＊『唐話類纂』（号翠柳・字麟嶼）の編纂始るカ。

享保一〇年乙巳（一七二五）四八歳。

春、京都へ遊ぶ。『月坡全録』の「松雲禅師傳」を読み、その斉東野語の誤解を解くために新たに松雲伝を作る（「普門松雲禅師傳」『西溟余稿』文部二）。

二月、「唐音雅俗語類序」を書く。翌年一月刊（『唐音雅俗語類』）。なお、冠山・大潮・天産・恵通・徂徠・東野・春台・東海等編『唐話類纂』巻之一、写（篠崎東海・山田正朝ら編）も同時期頃成る草稿カ（『唐話辞書類集』第一集）。

四月二八日、蓮池藩二代藩主鍋島直之（要玄院了関宗勇大居士）卒す。八三歳（『西溟余稿』文部三）。

享保一一年丙午（一七二六）四九歳。

一月、岡嶋冠山の『唐音雅俗語類』五巻刊（京都三條通升屋町／江府日本橋南一丁目／出雲寺和泉掾）に大潮序文。

四月一日、夢に國思靖先生が現れ、唐詩を清らかに音読してみせる（『松浦詩集』中）。

この年冬から次年にかけ手瘡を病む。院事の務めを果たさず、丈室に籠り鬱陶しい日々を過ごす。病障のためか、侍者寂通が部屋に宿していたとき、夢の中に林百載が現れ劉素軒が贈る詩に贈答したが、夢とも現とも判別つかない錯乱状態にあった。龍津寺在。その後、翌年春にかけ熊河温泉に行く（『西溟余稿』詩部下）。

享保一二年丁未（一七二七）五〇歳。

正月から二月、手瘡を病み熊河温泉で養生する（「熊河二十絶并序」『西溟余稿』詩部下）。

六月、院を辞そうと考えるも秋まで待ち、七月立秋の五日後院を辞す（『西溟余稿』詩部下）。

九月九日、弟子寂通を伴い松浦より長崎へ赴き、樊子範（高尾甚八）を祝う（『西溟余稿』詩部下）。

除夜、長崎の僑居浦上で過ごす（『西溟余稿』詩部上、下）。

享保一三年戊申（一七二八）五一歳。
元旦、長崎にて新年を迎える。＊同二日、岡嶋冠山京都で病死、五五歳（『先哲叢談後編』）。
一月一九日、荻生徂徠没す。六三歳。二月、京都の宇野明霞より徂徠先生の訃報を知らせる書簡を受け、哀詞一章を作る（『西溟余稿』詩部上）。
二月三日、妹婿古川氏（法誉真徹居士）没（『魯寮詩偈』）。晩春の頃、林百載・樊子範・平叔雍に留別詩を贈り長崎を去る（『西溟余稿』詩部上、下）。
三月末出立して江戸へ赴き、夏、深川の旧知と逢う。七月七日、夜深川にて船遊びを楽しむ。秋日、徂徠の墓へ参り哭す（『西溟余稿』詩部上、下）。
深川に卜居し魯寮と扁額する（『西溟余稿』詩部上）。閏九月九日、館中の諸子に雨にて行けないことを詠み送る（『西溟余稿』詩部上）。
享保一四年己酉（一七二九）五二歳。
元旦、江戸で正月を迎える（「己酉元旦作」『西溟余稿』詩部上）。同一九日、徂徠小詳忌を迎え重悼詞を作る（『西溟余稿』詩部上・下）。旧年一一月一日、石叔潭（石川大凡）に子が誕生したことを祝す（「歳首簡石叔潭」『西溟余稿』詩部上）。
三月、江戸を発つ。都下の諸才子と留別詩を贈答。紀州を経由して長崎へ到り、崇福寺の道本寂傳を訪ねる（『西冥余稿』詩部下）。
九月一一日から一三日、寶壽庵に宿す（『西溟余稿』詩部上）。
秋、「魯寮硯銘」を書き、東都で交遊した岡白玉・物徂徠・倪天泐三子を偲ぶ（『西冥余稿』文部二）。
一二月晦日、樊子範宅で年を越す『西溟余稿』詩部上）。
享保一五年庚戌（一七三〇）五三歳。
元旦、長崎で新年を迎える（『魯寮稿』五）。
この秋、来崎中の沈燮庵、孫輔齋らと交遊するカ（「寄清人沈燮庵儒宗二首」など『西溟余稿』詩部上）。
九月十三夜、東明山興福寺にて天産禅師を懐う詩（『西溟余稿』詩部下）。
一〇月一〇日、佐賀から松浦に帰り、さらに長崎へ来る（『西溟余稿』詩部下）。
大晦日、長崎で過ごす（『西溟余稿』詩部下）。
享保一六年辛亥（一七三一）五四歳。
長崎にて迎春、二月一五日江戸へ赴き諸子と交遊、夏、九州へ帰る。この間、清人沈燮菴、孫輔斎、崇福寺珣禅師らと贈答また林百載に離別の詩あり（『西溟余稿』詩部下）。
この頃カ、松浦郡伊万里の「天満神祠神門銘并序」を記す（『西冥余稿』文部二）。
＊五月九日、黄檗山第八代悦峰道章、山内真光院で示寂、八〇歳。
＊八月宇野士朗没す。享年三〇。
享保一九年甲寅（一七三四）五七歳。
享保二〇年乙卯（一七三五）五八歳。
＊三月一九日、山田正朝（号翠柳・大佐・麟嶼）痘にて没、

二四歳（「山田麟嶼學博墓碣銘」『紹述先生文集』巻之十三）。
三月、この頃から黄檗山第十三代に竺庵浄印が晋山し、大潮は監寺を勤める。

元文元年丙辰（一七三六）五九歳。
『松浦詩集』三巻三冊刊（京寺町松原下町／尚古堂田中甚兵衛）。但州、天産霊苗序。

元文二年丁巳（一七三七）六〇歳。
大潮、黄檗山都寺を勤める（「大潮上人丁巳春為六十請詩余、時上人将帰黄檗因壽且送別云」『猗蘭臺集』巻之二、二稿）。
三月、相良藤侯の書室について依頼され「千秋館記」を書き贈る（『魯寮文集』上）。

元文三年戊午（一七三八）六一歳。
一月、「刻明四大家文抄序」、「刻王氏詩教序」を書く（『魯寮文集』上、大潮編『明四大家文章』三冊刊）。
八月、住持竺庵のもとで役僧間の意見の対立が生じ、都寺大潮、直歳実岩浄裕・即湛浄然・無染浄善ら四人とも免職となる。官命により黄檗を退き、九月一四日江戸に行く。その前夜京都清水万山邸にて月を賞した。その後京都へ帰り、三月滞在する（「有感并序」『魯寮詩偈』『魯寮稿』六）。
秋、「墨刻董其昌字帖跋」を書く（『魯寮文集』下）。
一〇月、洛邑僑舎で「東遊同帰集序」を書く（『魯寮文集』上）。
一一月一七日、佛國堂大遷道龍が江戸滞在中に示寂、大潮は西京の僑舎から祭文「祭佛國大遷和尚文并序」を書き送る（『魯寮文集』下）。

元文四年己未（一七四一）六二歳。
京都で元日を迎える（『魯寮詩偈』）。
＊二月一二日、京都町奉行の裁定が下り竺庵は隠居、監寺ら役僧らは追放された（『黄檗文化人名辞典』）。
三月九日獅子林に宿す。同月晦日、京館に宿す（『魯寮詩偈』）。
四月、「澤升英獨善集序」を書く（『魯寮文集』上）。
九月、大潮と浄善・浄裕二公と前年竺庵との意見対立の後、前年東行した際の唱和詩を巻冊子とし、山城乙訓郡長田新田村千丈山養雲庵住持の覚天元朗和尚に送る（『魯寮詩偈』）。
一二月一二日、京都町奉行所の裁定によって竺庵浄印は住職としての仕事の不宜につき隠居を命じられ、監寺大淵、衣鉢忍仙、丈侍天寿らは追放された。竺庵は同一八日に伏見の海宝寺に退隠した（『黄檗文化人名辞典』〈無染浄善〉の項。『黄檗山知客須知』による）。
一二月一六日、官命により大潮ら四名に黄檗山に帰山を許される（『魯寮詩偈』）。

元文五年庚申（一七四〇）六三歳。
＊四月、『徂徠集』三〇巻刊（武江書林／谷村豊左衛門梓行）。
五月、黄檗山竹林にて「梵網経古迹記詳解序」を書く（『魯寮文集』上）。
九月一三日、大潮と東行した三名は黄檗山を辞した。三年前の九月一三日、洛邑のある居士は東行する三名を邀えて月を賞した。ここにおいて三年が過ぎ、事を終えて帰郷することになり、「賞月并引」の詩あり（『魯寮詩偈』）。

孟冬、『松浦詩集』三巻三冊（京都　尚古堂刊）。
一〇月二六日、大坂の港を発した。一一月四日、船中にて霊潭律師の七周忌の偈を詠む（『魯寮詩偈』）。箱崎から太宰府に向い、菅相廟に参拝する（『魯寮詩偈』）。
一一月一五日、龍津寺に帰り着き先師の塔に礼拝した。また牛津に行き、前年五月に正満寺の智廓が示寂したことを知り「追悼智廓并引」を詠む（『魯寮詩偈』）。
一二月三日、故郷伊万里へ帰る。同月二三日牛津から小城へ赴く（『魯寮詩偈』『魯寮稿』二）。

寛保元年辛酉（一七四一）六四歳。
元旦、龍津寺にて迎える（『魯寮詩偈』）。
＊二月九日、石叔潭（石川大凡）没、六四歳（「悼石叔潭并序」『魯寮詩偈』）。
二月二五日　圓福寺に錫す（『魯寮詩偈』）。
四月二八日、蓮池藩主故鍋島直之（要玄院了関宗勇大居士）の一七年忌を営む（『魯寮詩偈』）。
七月一三日、享保二、三年の凶作で餓死に及んだ民のため「肥民累葬墓誌銘」を書く（『魯寮文集』下）。
仲秋、石州円光寺の無隠道費から送られた『無孔笛』六巻（機禅侍者編）を評し一偈を贈り祝す（『魯寮詩偈』）。また「円光無隠禅師無孔笛序」を書く（『魯寮文集』上）。
九月、筑後柳川の天山大渓禅師の詩集『雪峯天山禅師遺稿』二巻に「天山詩稿序」を書く（『魯寮文集』上）。
一一月、松浦より蓮池に帰り、月海禅師（賣茶翁）が一〇月下旬に帰郷しているのに逢い旧懐を述べて歓談、昨年春作った「賣茶偈」にたいし喜びの気持を詠んだ（「誌喜并引」『魯寮詩偈』）。
一二月朔日、「読誦法華経塔誌銘」を書く（『魯寮文集』下）。

寛保二年壬戌（一七四二）六五歳。
一月一九日、蓮池藩主鍋島直之の異母弟鍋島之治の妹體眞尼の伝「大尼體眞大姉傳」を書く（『魯寮文集』上）。
二月、「送賣茶翁再游洛序」を書く（『魯寮文集』上）。
三月、肥前金立権現「重建金立権現神祠記」を書く（『魯寮文集』上）。
六月、石叔潭の著『唐詩礎続編』に「唐詩礎続編序」を書く（『魯寮文集』上）。
＊一一月四日、浄覚天民上座長崎で寂す（『魯寮稿』二）。

寛保三年癸亥（一七四三）六六歳。
二月、長崎の田邉桑溪からの書簡を受け返信（「復長崎田邉詞士書」『魯寮稿』一）。二月～三月初旬に長崎へ赴き、晩春まで滞在したか。
三月、肥前彼杵郡長崎小瀬戸の観音社「長崎南海山記」を書く（『魯寮文集』上）。
閏四月、肥前は孟夏大干魃につき諸僧祈雨、同一一日大雨（「喜雨并序」『魯寮稿』一）。同一九日入梅（「梅雨偶成」『同上』）。
六月、官命をうけて京洛へ赴く。同月一七日、城西に藩府から賜った所に住居新築成る。二一日、移居（「立秋日即事」『魯寮稿』一・二）。

秋、泉流寺（摂津宝塚）の天産霊苗（一六七六－一七四三）がこの年五月七日没（六十八歳）を聞く（「聞泉流天産和尚訃、産別号落梅花」『魯寮稿』一）。
秋、長崎の唐通事林百載（一六八九－一七四七）宛書簡「寄林居士百載書」、同一〇月付け「寄林百載居士書」がある（『魯寮稿』一）。
一〇月三日、「藤公子維新」（鍋島直之の子息カ）龍津寺を訪れる（『魯寮稿』一）。

延享元年甲子（一七四四）六七歳。

一月三日、新居で「早春寓詠」を詠み、南は海に面し温暖な場所であり、母の健康に良いと喜びを表す（『魯寮稿』二）。
四月一五日、祝事あり京洛へ赴き五月七日到着。五月一六日、賣茶翁七〇歳の誕生日を寿す（「壽賣茶翁七十」『魯寮稿』二）。
五月一九日、賣茶翁の煮茶に招かれ萬家亭に遊ぶ（『魯寮稿』二）。「寄贈賣茶翁」（『魯寮稿』四）を贈る。
五月二四日、終南法姪と詩仙堂を訪れる（『魯寮稿』二）。
六月七日、加賀の実性院（曹洞宗）の無隠道費からの書信（『金龍尺牘集』序文の件）に再復す（『魯寮稿』二）。
六月、無隠道費「西溟大潮禅師魯寮詩偈後序」（『魯寮詩偈』）。
秋、『魯寮詩偈』一冊刊行（京寺町松原下町／尚古堂田中甚兵衛）。浄介紫石序、無隠道費後序あり。
＊この年『無隠禅師無孔笛』六巻三冊、刊。
夏から秋にかけ、直指庵の無染浄善と贈答詩（『魯寮稿』二）。
七月一二日、「新興氏原篆単法序」を書く（『魯寮稿』二）。
八月、「説彫署」、「魯寮別集文序」を書く（『魯寮稿』二）。
八月一八日、唐通事樊子範（高尾甚八）卒、八一歳（「薦樊子範居士」『魯寮稿』二）。
一〇月四日、京都を留別し、摂津貝塚に滞在、二〇日摂津を発ち二五日赤間崎、月末に帰郷（『魯寮稿』二）。その途中、南予州辺では荒波で蔵書一千巻余巻を潮水に濡らし損壊をこうむった（「答鶴元偲」『魯寮稿』五）。
一一月、「魯寮別集詩序」（『魯寮稿』二）。
一一月二三日、桐野山智雲上人（多久）を尋ねるが留守で、壁間に清人伊孚九の書が有り次韻する（『魯寮稿』二）。

延享二年乙丑（一七四五）六八歳。

初春頃か？『魯寮文集』二巻二冊刊行（京都　額田正三郎）。
＊四月一七日、宇野士新、洛外にて没す。四八歳（『魯寮稿』三）、（大典「明霞遺稿序」『小雲棲稿』巻七）。
孟夏、長崎へ赴き大音寺玄海上人を訪問、贈答詩あり。分紫山福済寺に滞在し田邊桑渓・村岡重徳・向井元仲・沈草亭・伊孚九ら清人とも交遊する。この間、長崎での所懐・詩賦多し（『魯寮稿』二、三、六）。
八月一八日、樊子執（高尾嘉左衛門）の父樊子範（高尾甚八、法名値圓通院温知日得居士）の小祥諱辰を追薦する（『魯寮稿』三）。九月中、「九淵集」、「平志和詩稿序」を草す（『魯寮稿』三）。
九月九日、諏訪神会を見物、同一一日、雨森芳洲に書簡。同一五日、平野志和（四〇年前に國思靖に華音を学んだ同学の

子）に返書（『魯寮稿』三）。九月二二日、一〇月三日、體性寺にて詩会（『魯寮稿』三）。

＊一〇月七日、福岡藩儒竹田春庵没す、八五歳。

一〇月、長崎の諸友と樊子執（高尾嘉左衛門）亭に集う。孟冬、文孚明の館を発ち松浦へ帰る（『魯寮稿』三）。

一一月一日、洛の書林田中氏の需めで近江の泰宇道瑞の集に「詩家音律序」を書く（『魯寮稿』三）。

延享三年丙寅（一七四六）六九歳。

松浦にて「丙寅元旦」の詩があり、三月まで神光院終南・方広雲峯らとの書簡の往復あり（『魯寮稿』三）。

春頃、春庵からの書簡を見ず、その死を知らず、後悔の書「答竹田先生書」を書く（『魯寮稿』四）。

八月、「辨霊隠晦山顕和尚復禅通剱叟是禅師書」を書く（『魯寮稿』四）。

八月二〇日、福源寺の文瑞禅師へ返韻（『魯寮稿』四）。

仲冬、松浦より帰り途中桐野山を訪れる（『魯寮稿』四）。

＊一二月一一日、體真尼示寂、六七歳（『魯寮稿』四）。

この年「石叔担唐詩礎序」（『唐詩礎』二巻、『西溟余稿』文部一）を書く。

一二月二五日、「除夕作」の排律、雪の歌二首「柴の戸を～」「ふかき夜の～」あり（『魯寮稿』五）。

一二月二七日、大潮が先師の墓参に蓮池に行き留守中、廬を守っていた侍者の僧玄珪が三人の悪僧（法姪紫石の弟子）に殺され放火された事件の内実と侘びの復書（「復實松父子書」「復祐徳東溟禅師」『魯寮稿』四、五、六）。

延享四年丁卯（一七四七）七〇歳。

一月九日、唐大通事林百載（一六八九－一七四七）没、五九歳（『唐通事家系論攷』）。「弔平叔雍」（『魯寮稿』四）。

一月一〇日、母鏡月元照禅尼伊万里郷にて没、享年八八。同一二日に蓮池で大潮訃報を受け、一五日古郷へ帰る（「悼母氏并序」『魯寮稿』五）。「悼母氏并序」を作る。同月一五日、蓮池を発ち駆けつける（『魯寮稿』四）。

四月六日、岡白駒（千里）に『西溟余稿』の序文を依頼する書簡を書き、六月一三日清書（『魯寮稿』四）。『西溟余稿』文之部一に掲載される。

四月一八日、金立山に移居、五月四日下り、桐野山を経て一〇日に松浦へ帰る（『魯寮稿』四）。

五月二二日、二月七日付けの賣茶翁書簡に復す（「復賣茶翁書」『魯寮稿』四）。

六月一三日、下村道瑞の『詩家音律』二巻につき評価する（「復下村道瑞医士」『魯寮稿』五）。

六月一七日、神光院終南法姪に書物の校正の難しさを三年前上梓の『魯寮別集』を例に示す（『魯寮稿』五）。

七月三日、岡千里に、同じころ大典に書簡（『魯寮稿』五）。

七月、医師「花房雲光秋白墓碣銘」を書く。三〇余年長崎に在り、清人沈燮庵と善く交遊したことを記す（『魯寮稿』五）。

八月一五日、金立山房にて月を詠む二首（『魯寮稿』五）。

八月二七日、疾により金立山房に臥し、先師化霖道龍に侍し、

達磨西来と国師隠元禅師東渡について問われた夢を見る（『魯寮稿』五）。
一〇月四日、佐賀藩多久教授・實松晋亭歿す、四七歳。「悼恭靖先生晋亭并序」を書す（『魯寮稿』五）。
一一月三日、「和高君秉見寄」の下に「長崎船津町、高村忠蔵、名彝」と記して詩あり（『魯寮稿』五）。
一一月九日、龍津寺開山先師諱景の辰の前日、金立から蓮池に到り、詩あり（『魯寮稿』五）。
一一月一〇日、『藤皐印譜』に後序を書く（『魯寮稿』五）。
一一月一七日、龍津寺において「立名辨」を書く。蓮池藩第四代藩主・鍋島直恒の嫡子直之助の名を「直興」とすべきと主張（『魯寮稿』五）。
一二月、京洛より無参禅人が来て木彫の釈迦像をもたらすにより「無参得木仏頭記」を書く（『魯寮稿』五）。
一二月二二日、先慈鏡月元照禅尼の初度の辰（『魯寮稿』五）。

寛延元年・延享五戊辰年（一七四八）七一歳。

一月二日、蓮池に行き先師塔に詣る（『魯寮稿』五）。
一月七日、國思靖先生の忌辰を祭る（『魯寮稿』四、五）。
一月一〇日、先慈鏡月元照禅尼の小祥辰詩三首追薦する（『魯寮稿』五）。
二月一八日、「春雨懐京洛津南諸友」を詠む（『魯寮稿』五）。
春、『西溟余稿』文部三冊刊（京都寺町松原下　田中甚兵衛／寺町松原上　辻井吉右衛門）。
三月三日、肥後廬山東林寺（黄檗宗、人吉市浪床町）「雙鶴亭記」を書く（『魯寮稿』五）。
三月一三日、東林寺にて「山中座雨」など詠む（『魯寮稿』六）。
三月晦日、京洛の旧友から書簡数函を得る（『魯寮稿』六）。
晩春、三年前（延享二年）瓊浦から持ち帰った海棠の花が初めて咲いた詩を詠む（『魯寮稿』六）。
四月一日、「跋江副氏族譜後」を書く（『魯寮稿』五）。
四月五日、金立山房壁に詠詩（『魯寮稿』六）。
四月一〇日、「龍津旧院座雨」二首。同月下旬まで病中にある（『魯寮稿』六）。
＊五月一七日、無染浄善示寂。七二歳。
＊八月、売茶翁『梅山種茶譜略』を著す。
＊一〇月、大典編『明霞先生遺稿』八巻刊（平安書肆田原重兵衛謹刻）。

寛延二年己巳（一七四九）七二歳。

＊五月、『東野遺稿』三巻刊（江都書肆嵩山房小林新兵衛）。
＊一〇月一六日、蓮池藩主第四代・鍋島直恒、江戸にて卒す、四九歳。
一一月一七日、鍋島直之助直興、僧紫石浄介に請い蓮池城中にて鍋島直恒の法諱を龍華院實巌玄成大居士とし焼香する（『魯寮稿』六）。
一一月二七日、鍋島直興の請いにより金立山自慶禅庵にて一門の先霊を祀る（『魯寮稿』六）。
この年、「復高隠士賣茶翁游外」を書くカ（『魯寮稿』七）。

寛延三年庚午（一七五〇）七三歳。

三月三日、松浦にて『金龍尺牘集』序を草す（『金龍尺牘集』上）。
＊三月二二日、鍋島直興（一七三〇－一七五七）蓮池藩第五代藩主を継ぐ。
五月、蓮池に出る（『魯寮稿』七）。
六月一一日、寶壽山に滞在中、三〇年前京畿にて病死した岡嶋冠山を夢に見る。夢中、冠山は文事に言及し喜々としていたという（『魯寮稿』七）。
七月、長崎の永田島仙の印譜に序文を書く（「島仙印譜序」（『魯寮稿』七）。
八月、「黄檗百癡禅師三會語録序」を書く（『魯寮稿』七）。同じ頃、「復黄檗百癡和尚」を書く（『魯寮稿』七）。
八月一五日、龍津寺で賞月（『魯寮稿』七）。
九月一七日、「答圓明法姪紫石法姪書」を書く（『魯寮稿』七）。
九月一八日、賣茶翁からの七月五日付け書簡を得る（『魯寮稿』七）。
一一月一三日、医師武宮元駿の詩につき唐明の格調ありと評す（「与武宮醫士元駿」（『魯寮稿』七）。

寛延四年・宝暦元年辛未（一七五一）七四歳。
元旦、前年二七日に松浦に帰り、新年を迎える。同五日、「寄賣茶翁遊外老隠士」を書く（『魯寮稿』七）。
三月、「金龍尺牘集序」、「介石常棣篇序」「跋心學典論外魔總序後」を書く（『魯寮稿』七）。蓮池北小路に小庵を結ぶ。
春日、石淑潭「重刻唐詩礎跋」、同春「跋大義禅師毒鼓録後」を書く（『魯寮稿』七）。
四月一一日、「張継詩、夜半鐘聲解後記」を書く（『魯寮稿』七）。
四月二〇日、松浦を発ち桐野山に到る。同月二十六日金立山房に帰る（「帰来吟二首」『魯寮稿』七）。
五月、黄檗百癡元拙和尚、日光法親王に請われ黄檗本山の第十六代となる（「答黄檗百癡和尚」『魯寮稿』七）。
八月、鍋島甲斐守直興の求めにより「学則」を草す（『魯寮稿』七）。
九月二日、「懐京洛諸友」を詠む（『魯寮稿』七）。
九月一三日、蓮池より帰り「山房賞月、二首」（『魯寮稿』七）。

宝暦二年壬申（一七五二）七五歳。
二月朔日、「正覚山宗眼寺之記」を書く（『西溟余稿』文部二）。

宝暦三年癸酉（一七五三）七六歳。
三月初旬、長崎を一〇年ぶりに訪れ、すでに長逝した唐通事林百載・平叔雍・張道智ら旧故輩たちを偲ぶ（「瓊浦有感并序」『瓊浦游艸』）。
四月二日、分紫山福済寺の塔頭永聖院に遊び、同九日は高君秉宅を訪問、その後唐通事たちとの贈答が催される（「四月九日訪高君秉席上賦贈」『瓊浦游艸』）。四月から、君秉の世話で魚街玉氏別荘で病気静養する（同上）。
五月、眞子栢亭に滞在し、詩会を楽しむ（『瓊浦游艸』）。
六月一五日、肥前長崎「香焼山圓福禅寺記」を書く（『瓊浦游艸』・『魯寮稿』八）。
六月、長崎聖堂の『輔仁堂小集』を読む（『瓊浦游艸』）。

七月三日、「瓊浦対雨聊述所思」を書く（『魯寮稿』三）。
七月穀旦、肥前多久「桐野山妙覚寺記」を書く（『瓊浦游艸』）。
七月六日～下旬まで沈草亭、伊孚九らと交わり瓊浦の友人宅を転々と詩会を楽しむ（『魯寮稿』三）。
八月二日、高暘谷（渡辺忠蔵）の子没し、詩十三首を詠み、大潮評す（「評高君秉哭児詩」『瓊浦游艸』『魯寮稿』八）。
八月一五日、永聖院で月見、伊孚九ら華客らを交えて詩の唱酬（『瓊浦游艸』）。
八月二三日、筑後町の文孚明（村岡重徳）の幽軒に滞在し勝景を楽しむ（「与村岡生」『魯寮稿』三）。
八月二七日、田邊桑溪宅で詩会（『魯寮稿』三）。
八月、「永聖第三代院主廓堂禅師音公像賛并序」（『瓊浦游艸』『魯寮稿』八）。
九月九日、瓊浦神会（くんち）を観る（『瓊浦游艸』『魯寮稿』三）。
九月一五日、長崎清水伯民（利右衛門、逸）の印譜に「雕蟲館印譜序」を書く（『魯寮稿』八）。
一〇月、「子柏詩集序」を書く。この間、高君秉・眞子柏・樊彦卿らと雅交（『瓊浦游艸』『魯寮稿』八）。
一二月一三日、樊彦卿の求めに応じ「座右銘」を書く（『魯寮稿』八）。
一二月二〇日、光永寺にて諸子集まり詩会あり（『瓊浦游艸』）。
一二月晦日、福済寺紫雲亭にて年越しの詩を詠む（『瓊浦游艸』）。

宝暦四年甲戌（一七五四）七七歳。
正月吉旦、長崎で春を迎え（『瓊浦游艸』）、「無隠禅師四會語録序」を書く（『魯寮稿』七）。
三月八日、「子柏詩集序」を清書。三月中旬、高君秉ら諸子と留別し、長崎を去る（『瓊浦游艸』『魯寮稿』八）。
四月八日、「西浦略集序」を書く（『魯寮稿』九）。
八月一三日、大潮の実弟浦郷實友の墓碑銘「一麟浄超居士墓碑銘」を書く。實友は貞享二年伊万里の生まれ。宝暦四年七月九日卒す。享年七〇（『魯寮稿』九）。
一〇月、『金龍尺牘集』二巻刊（長州瑞雲山太寧護国禅寺蔵版）。同月、「跋武元元駿詩巻後」を書く（『魯寮稿』九）。
一一月、「書大般若経櫃」を瑞光寺住持の代り書く（『魯寮稿』九）。
一二月一一日、壽柏元剛禅尼、祖母浄観妙厳尼の三十三年忌を法要する（『魯寮稿』九）。

宝暦五年乙亥（一七五五）七八歳。
五月八日、上田布施に長淵寺竣工、大潮が開山となる「甘露大潮和南、撰于太寧山寺松竹窓下、与諸徒子」（『魯寮稿』十）。
夏ごろ、「評暘谷高生奉沈帰愚書」を書く（『魯寮稿』九）。
八月二三日、高暘谷の近稿一巻を批評する（「評高生暘谷近稿」『魯寮稿』九）。
＊九月四日、売茶翁（八一歳）仙窠を焼却し茶を売ることを止める（『賣茶翁偈語』）。
一二月一日、「湛叟禅師十境偈引」を書く（『魯寮稿』九）。

一二月一一日、浄看妙厳（大潮の祖母）の祖母壽柏元剛禅尼の三十三年忌辰を代わって書く（『魯寮稿』九）。

宝暦六年丙子（一七五六）七九歳。

一月頃、病気のため長崎より肥前に帰る。この年、亀井道哉（南冥）（一四歳）大潮に学ぶ（『魯寮稿』十一）。

二月、医師原公瑶の史論「桂館野乗」、及び三村親信「嘯傲軒稿」に序文を寄せる（『魯寮稿』九）。

九月二日、姉川を発ち蓮池に帰る。九月九日、城北の精廬で即事（『魯寮稿』十一）。

九月一三夜、龍津寺で賞月（『魯寮稿』十一）。

九月、「向井道永居士画像賛并序」を書く（『魯寮稿』十三）。

一〇月、「版居士巻軸序」を草す（『魯寮稿』十）。

一〇月九日、龍津寺開山先師の諱辰を催す（『魯寮稿』十一）。

一二月六日に桐野山妙覚寺（多久市）に往き、一〇日、同寺から牛津港へ赴く（『魯寮稿』十一）。

宝暦七年丁丑（一七五七）八〇歳。

一月六日、龍津寺において大潮八〇歳の祝寿あり、二月六日二、三の諸弟子参集す。法語を示す（『魯寮稿』十、十一）。

二月二九日、本多猗蘭侯逝去、六七歳。大潮は八月に知り追悼（「猗蘭藤侯哀詞并序」『魯寮稿』十一）。

五月五日から姉川に滞在し、同月九日に蓮池に帰る（『魯寮稿』十一）。

七月一八日、蓮池侯大慈院鐵舩廣濟大居士、終七忌辰の偈を薦む（『魯寮稿』十一）。

八月、称念教寺第十五世、澄誉上人記念の「常夜燈并序」を撰す（『魯寮稿』十）。

八月、「猗蘭藤侯哀詞并序」を書く（『魯寮稿』十一）。

八月二七日、原尚菴より猗蘭侯・高野蘭亭・寶泉州法姪から大潮八〇の壽詩あるを受ける（『魯寮稿』十一）。

九月一日、原公瑶の「叢桂館詩軌序」を書く（『魯寮稿』十）。

一〇月七日、「讀蘭藥藤侯遺稿并序」を書く（『魯寮稿』十一）。

一〇月一六日、雪峯大渓禅師示寂（『魯寮稿』十一）。

一〇月二二日、姉川へ行き同月二八日頃まで滞在する（『魯寮稿』十一）。

一一月下旬、法泉悟心禅師への返信に『西溟余稿』詩部が未刻で待っている事を記す（『魯寮稿』十）。

一二月九日、「送守庸禅人序」を書く（『魯寮稿』十）。

宝暦八年戊寅（一七五八）八一歳。

正月下旬、「憶昔并引」で東都での八年の諸賢との交遊を回顧する（『魯寮稿』十一）。

春、『西溟余稿』詩部二冊刊（尚古堂田中甚兵衛他）。

五月二五日、姉川吉祥寺へ赴く。宇野士新『左傳考』の序文を草す（「左傳考序」『魯寮稿』十）。同日、大典（梅荘西堂）からの書信「答大潮和尚」（『小雲棲稿』巻十一）に二月中旬頃、高階暘谷宅に来訪者多く俊逸の様子を報ず（『魯寮稿』十）。

五月、高暘谷の「清沈確士七子詩選跋」、及び宇野士新の『左伝考』の序を書く（『魯寮稿』十）。

五月二五日、「復真如梅荘西堂書」を書く（『魯寮稿』十）。

七月三日、「立秋夜、憶月海兄」五律詩あり（『魯寮稿』十二）。
九月二日、姉川を発ち蓮池に帰る（『魯寮稿』十一）。
九月、「寄壽真野俊菴国手七十」（『魯寮稿』十二）。
一〇月五日、六月いらい小瘡を病んで服薬すること三月になるが癒えず薬湯に入る（「於浴桶偶成并引」『魯寮稿』十二）。
一二月、宇野士新の『左伝考』に序を寄せる（『魯寮稿』十三）。

宝暦九年己卯（一七五九）八二歳。

一月六日、「生日写懐、余今年八十二矣」（『魯寮稿』十二）。
一月一〇日、母、鏡月元照禅尼の十三年忌辰の詩偈（『魯寮稿』十二）。
四月七日、蓮池より姉川へ行く。一二日、姉川に遊ぶ（『魯寮稿』十二）。
＊六月二一日、服部南郭没、七七歳。
七月六日、佐嘉より嬉野に赴く途中早涼の感生じ、杜少陵詩「七月六日苦炎熱」（「早秋苦熱、堆案相仍」『杜少陵詩集』巻六）を思い浮かべる。嬉野温泉で湿瘡を治療する（『魯寮稿』十二）。
一〇月三日、「懐高隠士遊外」を記す（『魯寮稿』十二）。
一〇月二三日、筑後の武宮元駿より書簡に芙蓉山図の七言詩あり、賦詩を返す（『魯寮稿』十二）。
一一月、「夢見河水記」を書く（『魯寮稿』十三）。
一二月、「歳暮憶京洛高隠士遊外」を賦す（『魯寮稿』十二）。

宝暦一〇年庚辰（一七六〇）八三歳。

一月、雪のような白髪になったという（「新正偶然作」（『魯寮稿』十二）。
＊四月、唐通事樊子執（高尾嘉左衛門）『長崎實録大成』叙を書く。
＊五月三日、家重の隠居により徳川家治後を継ぎ、九月二日第十代将軍職に就く。
五月二八日、諸才子、龍津寺の大潮のもとを訪れ分題賦詩す（『魯寮稿』十四）。
この年か、「書亀道哉詩文稿後」を書く（『魯寮稿』十三）。
八月、「退蔵峯天桂禅師石墳碑」を書く（『魯寮稿』十三）。
＊八月、田邊茂啓『長崎實録大成』自叙を書く。
八月末、「和亀才子道哉、庚辰除日前四日、見懐之作、却寄三首」（『魯寮稿』十四）。
九月、天草の中村維明の詩集に「頤亭集序」を書く（『魯寮稿』十三）。
九月、勢南の張雅亮の著書につき「張子解老序」を書く（『魯寮稿』十三）。
一一月、「題清沈歸愚及清七才子和吾本邦高暘谷詩巻後」を書く（『魯寮稿』十三）。
一一月、「贈藤維敬才子序」を書く。（『魯寮稿』十三）。
一二月二七日、龍津寺第四代住持紫石浄介示寂す。六三歳（「為龍津紫石法姪起龕『魯寮稿』十三）。

宝暦一一年辛巳（一七六一）八四歳。

一月一六日、「菅神右相金書菅家系譜跋」を書く（『魯寮稿』

十三）。
三月、「北山白甫氏家蔵如意記」を書く（『魯寮稿』十三）。
四月一五日、「垂裕亭看月、得韻樓字」（『魯寮稿』十四）。
＊六月、蓮池藩主第六代鍋島直寛、大潮に二人扶持を与えて優遇、大潮儒書を講ず。
＊九月、大典『昨非集』二巻を浪花の蒹葭堂から出刊（宝暦辛巳秋浪華／木氏蒹葭堂雕梓）。
一〇月、『魯寮尺牘集』上下巻二冊刊（京師書肆　寺町五條上ル　田中甚兵衛・寺町松原下ル　梅村三郎兵衛　梓行）。
一〇月一九日、亀井道哉、家弟毅郷をつれて来謁する（『魯寮稿』十四）。

宝暦一二年壬午（一七六二）八五歳。
一月一日、龍津寺大殿にて「壬午元日」詩を詠む（『魯寮稿』十四）。
三月、永富獨嘯菴の著に「跋臥癖五篇後」を書く（『魯寮稿』十四）。
三月二六日、友人から服部南郭の詩について問われ、当代右に出る者がない詩人で于鱗調だが平仄を失する詩があるなどと評す（「答友人書」『魯寮稿』十四）。
三月、筑前の長尾武治著に序文を書く（「萬叢拾遺序」『魯寮稿』十四）。
閏四月、旱魃で藩主の命を受け雨乞いする（『魯寮稿』十五）。
八月一二日、夢に先師を見る。同十五夜、法兄月海を思う詩あり（『魯寮稿』十五）。
秋、蓮池より瓊浦に往く折、安芸の平賀房夫（晋民）の旧稿四巻の初編五言、七言の数百首を評す（『魯寮稿』十五）。
一一月、「評黄孟徴詩二十四首稿」を書く。木下順庵が出て、扶桑の詩は唐を慕い、新井白石・荻生徂徠・祇園南海・安藤東野・山縣周南・石河叔潭・服部南郭らが東都に集挙した。その後、魏晋詩の流もあったが風調はやや異なった。しかし皆歿して久しい。今は原公瑤・高君秉が西海に出てその才を漲らせていると評す（『魯寮稿』十五）。
秋、高暘谷妻没す。法名真室負光大姉。追悼詩三編あり。冬、東都の高蘭亭・徂徠ら泉下の人々を追思する（『魯寮稿』十五）。

宝暦一三年癸未（一七六三）八六歳。
一月一〇日、母鏡月元照禅尼の十七年忌に香語（『魯寮稿』十五）。
二月一〇日前後、浪華の蒹葭堂に和韻（『魯寮稿』十五）。
この年、金龍道人らが『賣茶翁偈語』を編集する。大典「賣茶翁伝」、大潮「賣茶翁偈語稿跋」を書く（『魯寮文集』下）。
＊七月一六日、賣茶翁、京都の大仏の南、幻々庵にて示寂、八九歳（『賣茶翁偈語、附名公茶器銘』、『近世畸人傳』）。

明和元年甲申（一七六四）八七歳。
五月、蒹葭堂の求めで「賣茶翁像賛」を書く（『魯寮稿』十六）。
七月一五日、月海元昭小祥忌辰を営む（「香語」（『魯寮稿』十六）。
八月二七日、肥前藤津郡塩田郷の慈眼山圓明禅寺は先師化霖道龍が最初に開創した寺で、十年の報鐘の偈を記す（「圓明寺

報鐘并序」『魯寮稿』十六）。
九月二八日、平房夫の同月四日付け書簡に返詩（『魯寮稿』十六）。

明和二年乙酉（一七六五）八八歳。
三月一八日、「書亀道哉讀医断後」を書く（『魯寮稿』十六）。
初冬、大潮が姉川へ出ているとき蘭陵禅師が甘露を訪問した。その翌日跡を訪ねてお目にかかった。翌早別れて返韻した（『魯寮稿』十七）。一〇月頃、姉川で『東野遺稿』を読み慷慨し悲喜こもごも懐旧する（『魯寮稿』十七）。
一〇月二八日、大潮の妹壽印浄古老禅尼示寂、八三歳（「夜興」『魯寮稿』十七）。
一二月八日、医師江文伯居士病卒を悼む詩偈を草す。享年四九（「薦智徳院誠譽文伯居士并序」）（『魯寮稿』十七）。
一二月晦日、亀井道哉の「歳晩九首」に追和する（『魯寮稿』十六）。

明和三年丙戌（一七六六）八九歳。
一月一日、向井文煥（齋宮）が来訪、壽詩を交わす（『魯寮稿』十七）。
三月、『英彦山志』を贈られ正應坊要静師に賀詞を送る（『魯寮稿』十七）。
四月五日、「題唐詩選国字解後」を浄写す（『魯寮稿』十七）。
＊一〇月三日、高暘谷没、長崎の禅林寺に葬られる。四八歳（『禅林寺過去帳』）。「高暘谷遺稿序」（『小雲棲稿』巻七）。

明和四年丁亥（一七六七）九〇歳。
＊大典「大潮和尚九十寿序」を書く（『小雲棲稿』巻七）。

明和五年戊子（一七六八）九一歳。
八月二二日、大潮示寂。蓮池の龍津寺に葬られる。大典「哭大潮和尚」（『小雲棲稿』巻三）。
「當寺第三代大潮元皓和尚之塔」（表）「昭和三十五年二月吉日敬再建　中島光次」（裏）

**【主資料】（＊その他は省略）**

『松浦詩集』大・三巻三冊（縦27・2×横17・8㎝）（中野三敏旧蔵、現福岡大学図書館蔵本）
『魯寮詩偈』大・一冊（縦27・1×横18・1㎝）（谷村為海蔵本）
『魯寮文集』大・二巻二冊（縦25・6×横17・7㎝）（谷村為海蔵本）
『西溟余稿』大・二巻二冊（詩部）（縦25・8×横17・8㎝）（中野三敏旧蔵、現福岡大学図書館蔵本）
『西溟余稿』大・三巻三冊（文部）（縦26・2×横17・5㎝）（国会図書館蔵本）
『魯寮尺牘集』大・二巻二冊（縦26・8×横17・8㎝）（国会図書館蔵本）
『瓊浦游艸』大・一冊（縦26・2×横18・4㎝）（旧・長崎県立図書館、現長崎歴史文化博物館蔵本）
『魯寮稿』大・十七巻十七冊（縦26・3×18・2㎝）（慶応義塾大学・斯道文庫蔵本）

**【主参考文献】**

『背振山と栄西／大潮と売茶翁』川頭芳雄（一九七四年三月刊、自家版）
『売茶翁集成』谷村為海・淡川康一・福山朝丸（一九七六年十一月刊、主婦の友社）
『近世日本に於ける支那俗語文学史』石崎又造（一九六七年九月刊、清水弘文堂書房）
『荻生徂徠年譜考』平石直昭（一九八四年五月刊、平凡社）
『京都藝苑のネットワーク』高橋博巳（一九八八年五月刊、ぺりかん社）

『江戸のバロック／徂徠学の周辺』高橋博巳（一九九一年五月刊、ぺりかん社）
『江戸漢詩選5「僧門」』末木文美士・堀川貴司（一九九六刊、岩波書店）
拙稿「高階暘谷――その風貌と逸詩――」（『活水日文』二二号、一九九一年三月刊）
同「『瓊浦遊草』の世界――大潮元皓の長崎滞在――」（『雅俗』創刊号、一九九四年二月刊）
『福岡藩儒竹田春庵宛書簡集』川平敏文・大庭卓也・菱岡憲司編、二〇〇九年五月刊、雅俗の会）
＊なお大潮・売茶翁の主要作品を収載・訓読する大冊『佐賀県近世史料』第九編第二巻（高橋博巳編、二〇一九年三月刊）が出たが、本稿では参照する時間を十分得られなかった。後考に委ねたい。

**【付記】**

本稿は「大潮元皓の生涯――言語生活を中心に――」と題して平成一八年（二〇〇六）年六月十一日（日）、日本近世文学会（於、専修大学文学部）で口頭発表したものである。発表では大潮年譜と唐話を介する言語活動、古文辞的思潮と詩作についても触れたが、それについては後考を期すつもりである。
本稿をなすにあたり故谷村為海氏、中野三敏先生にはご所蔵資料の閲覧とご教示を忝くした。衷心よりの感謝と御礼を申し上げますとともに、ご冥福をお祈りいたします。なお、史・資料閲覧の便宜をはかられた公私の図書館、文庫等各機関に謝意を表します。
また井上敏幸氏には大潮、売茶翁ゆかりの地の調査・探訪につき懇切な案内をたまわった。併せて学恩に深謝致します。